

通訳するための思考

船山仲他

(神戸市外国語大学)

This paper proposes a possible architecture of conceptualization processes constituting thinking for interpreting, paying due attention to the distinction between langue and parole on the one hand and between speaking/hearing in general and the act of interpreting on the other. While static knowledge of language should be included in the capacity of an interpreter, his/her online conceptualization of dynamic linguistic expressions in source and target utterances is at stake during the act of interpreting particularly in the simultaneous mode. Some authentic samples of simultaneous interpreting are cited to support the proposed version of the conceptualizer for interpreters, which contains at least such planning processes as segmentation, selection, structuring and linearization. Research on thinking for interpreting is to be promoted to an academic area dedicated to interpreting studies.

1. はじめに

通訳行為が言語のあらゆる側面に関わる限り、通訳研究もまた言語のあらゆる側面に目を向けることができる。つまり、言語の文法的、語彙的側面だけではなく、文化的社会的側面にも、発話の様態、発声などのパフォーマンスの側面にも、あるいはコミュニケーションの場全体の中での言語の貢献度にも目を向けることができる。そして、いろいろな学問分野の成果を活かしながら、また、多様な研究手法を他分野から学びながら様々な通訳研究がなされている。その概要については、Pöchhacker (2004, 2011) などに要領よくまとめられている。

他方、通訳行為の基礎と考えられる“言語変換”のメンタルなプロセスについてはブラックボックスの部分が多く、深い議論を展開する枠組みはまだしっかりと確立していないと言える。言語学や言語心理学などの研究成果を取り込みながらも、通訳研究独自の研究対象の絞り込みは十分ではないと思われる。聞くことと話すことを一体化した言語活動は通訳独特のものであるが、その一体化の本質にもっと迫る必要がある。通訳の実践や教育に役立たないと評される通訳理論があるとするならば、そのような一体化のメンタルなプロセスに十分注目していないことによるのではないだろうか。本稿では「通訳するための思考(thinking for interpreting)」という考え方を提起することによって通訳研究独自の対象となる領域を浮かび上がらせたい。

通訳研究として言語変換のプロセスを考えると、まず言語学の分野で得られた知見を活用したいところであるが、実はそこにひとつの落とし穴があるのではないかと思われる。近代言語学の言語の捉え方と通訳行為の実際との間には距離があることに注意したい。たとえば、通訳行為に関わる言語知識を問題にすると、言語の記号論的側面、つまり言語社会のメンバー間に蓄積されている言語記号の形式と意味のストックに注目するのか、それとも、特定の場面で通訳者が自身の言語知識をどのように呼び起こすのかに注目するのかによって言語学の成果の活用度に大きな差があり、通訳理論の観点からはその差を十分に認識する必要がある。前者は個々の言語使用を越えて一般化、抽象化された静的な記号体系の問題であるのに対して、後者は具体的なコミュニケーションの場面での話し手、聞き手の頭の中のこと、つまりメンタルな発話、理解のプロセスに関わる。このような区別は特別なことではなく、日常的には誰もが経験していることでもある。たとえば、**administration** という英語の単語に出くわしたとき、日本語で言うなら「管理」か「政府」か「投与」か・・・と考え、文脈に照らしてその意味を選ぶことは普通のことである。そして、その際に **administration** という言語表現 (= 記号の形式) がどういう意味 (= 記号の意味) とセットになっているかを問うことは記号論的側面に目を向けることであり、他方、特定の場面において文脈に照らして総合的に形式の意味を判断するプロセスを問うのが後者の側面である。言語学の知見を活用するとき、この区別に十分注意する必要がある。しかし、通訳プロセスの研究においてその区別をせず、**administration** という入力が「(薬の)投与」という出力につながったことを単に“背景知識の活用”とまとめてしまうならば、それはこの区別の理論的重要性を看過することになる。通訳行為に特有の現象を説明していくことが通訳研究の重要な仕事であるならば、現場の通訳者の頭の中で言語形式と概念の関係がオンラインでどう処理されているのかについて論じる態勢を取らねばならないであろう。

20 世紀初頭にソシュールが基礎を作った近代言語学は形式と意味の対としての記号を基に言語を記述しようとする。たとえばネイティブ・アメリカンの言語を記述するのであれば、その言語にはどのような単語があって、その単語の主な意味は何で、単語をどのように並べると文になるのか、という方向で記述する。このこと自体は言語を記述する方略として妥当であると思われる。しかし、日々の暮らしの中でコミュニケーションを支えている言語の姿こそが本来の言語の機能を表すのであり、言語の本質は発話に現れると考える方が言語の全体像を見ることを可能にしてくれるであろう。言語学の分野としては、音と形態の研究から統語論へ、そして意味論へ、そして語用論へと研究対象が拡大してきたが、言語記号を基礎にしていることに変わりはない。さらに推論や認知というような人間の能力に注目する発展もあるが、記号を基に議論を組み立てる言語学である限り、やはり発話の理解、言語表現の産出の問題とは別の次元のことである。その点で、心理学の分野では、言語形式を出発点にしない研究が見られる(Gentner and Goldin-Meadow 2003)。通訳研究としても、そこに注目したい。

しかし、通訳行為が現実的に言語形式 (= 表現) を扱っていることを考えたとき、通訳研究はなぜ言語形式中心の考え方から脱却せねばならないのか。それは、通訳行為が人間の思考から独立して行われる行為ではありえず、言語形式そのものではなくそれを扱う人間の思考能力に深くかかわっているからである。実際のところ、次節で述べるように、そもそも人間の思考能力が言語形式を使うことを可能にしていると考えた方が適切であろう。したがって、メッセ

ージを生み出す人間の能力を、そして、他人の言語表現を理解する人間の能力を基に考えるのが自然である。

もともと、言語と思考の関係は、長らく議論の対象となってきた。身につけた言語は世界の捉え方に影響するかという問題は、言語相対性仮説あるいはサピア＝ウォーフの仮説の名の下にしばしば議論されてきたが、次節で論じるように、ここではそのような考え方自体についての議論に落ち込むのではなく、それを乗り越えた次の段階の問題を扱いたい。それは、「言語と思考(language and thought)」から「話すための思考(thinking for speaking)」に視点を移そうとする言語心理学的議論である。第3節では、この考え方に基づく「通訳するための思考」について論じる。

2. 「言語と思考」から「話すための思考」へ

2.1 基本的な考え方

通訳の経験のある者は何語を話すかで発想に違いがあることを経験することがあると思われるが、少なくとも通訳が成立する限りにおいて人間は言語差を乗り越えて意思疎通を図ることができることも実感しているのではないだろうか。言語相対性仮説の有効性については Jackendoff (2012:77)の次のまとめに尽きるのではないと思われる：

The point is that it doesn't take differences in language to make radical differences in thought.

(要するに、思考における根本的な違いを生み出すのに言語の違いはいらない。)

つまり、たとえば自分が話す言語に「落ちてくる雪」と「地面にある雪」とを区別する単語がなくても、その区別をすることはできる。言語に頼らなくても、たとえば南北逆さまの世界を考えることはできる。そう考えれば、思考に対する言語の影響力は、あっても限定的なものにとどまると考えていいだろう。

ここでは、そのような考え方、および後で述べるような考え方に立ち、言語相対性仮説そのものについてはこれ以上議論せず、「言語と思考」と「話すための思考」という視点の違いに注目したい。心理学者スロービン「言語と思考」から「話すための思考」への移行について次のように述べている：

The consequence of this shift from names of abstract entities to names of activities is to draw attention to the kinds of mental processes that occur during the act of formulating an utterance. (Slobin 1996: 71)

([language や thought という]抽象的なものの呼び名を) thinking や speaking という]活動の呼び名に置き換えることによって、発話を形作る行為の中で生起するメンタルなプロセスに注意を向けることになる。)

つまり、「言語(language)」や「思考(thought)」は抽象的な概念であるが、「話す(speaking)た

めの思考(thinking)^(注1)は具体的な活動を指し、抽象的な概念から具体的な活動に視点を移すことによって発話時のメンタルなプロセスに注意を向けることができる。抽象的に捉えられた言語が抽象的に捉えられた思考にどう影響するかをいろいろ異なった種類の現象に言及して議論しても、それぞれのケースについて当てはまる議論をするだけのことになり、全てに当てはまる結論を導くことは牽強附会の説に陥る危険を孕む。むしろ、従来看過される嫌いのあった具体的な発話時のメンタルな働きについて考えることの方が生産的な議論に結びつくと考えられる。本稿では、抽象的な言語や思考一般ではなく、特定の発話行為における言語のどの面、思考のどの面に注目するのかを明確にできる視点を提案したい。

ところで、この「言語と思考」から「話すための思考」への“移行”という言い方は、議論の移り変わりを指すだけで、事柄の本質としてはむしろ逆向きの方向性をもっていると考えるべきであろう。つまり、人類の歴史としては、もともといろいろな事物や動作を概念的にまとめる能力、そしてそのまとまりを音声形式などに対応させる能力を人間が持っている、それが言語と呼ばれる記号系を生み出したと考えられる。そして、書記体系が成立するにつれ語彙集や文法書が書かれるようになった。今われわれの手元にある辞書や文法書も、夥しい数の個々の発話をベースに辞書編纂者が人為的に意味を抽象化することによって整えてきた。その結果、日本語、英語、・・・と呼ぶ言語が人間から独立して存在するように感じるが、それはあくまでも抽象化された概念である。そして、「思考」という抽象名詞も特定の「考え」を指すのではなく、人間の頭の中にある「考え」を一般的に抽象的に捉えたものである。それに対して「話すための思考」は特定の一回限りの発話に伴う思考(thinking)を扱うのであり、われわれの生活の中に生起する具体的な現象を扱う。そう考えると、「言語と思考」から「話すための思考」への「移行」は議論の対象に対するわれわれの捉え方を変えるという点での“移行”であり、実際の言語活動の中には、まず個別的な「話すための思考」があり、その集積に対して「言語と思考」という抽象的なテーマが考えられるとするのがむしろ自然であろう。「言語と思考」から「話すための思考」への移行という方向性は、先に「言語と思考」に関する議論があったからこの順序になるだけのことであると言える。

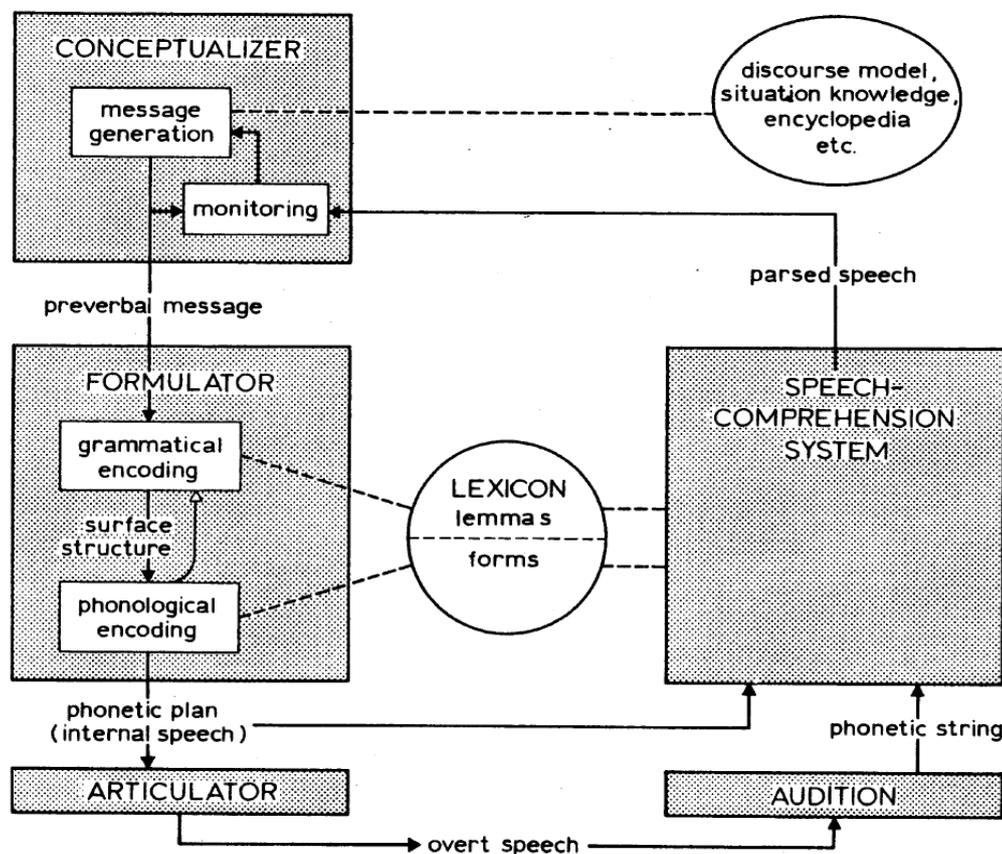
また、「言語と思考」から「話すための思考」への“人為的”移行は、言語学史における「言語の意味」から「言外の意味」への“人為的”移行に平行する。後者に関わるのは、コミュニケーションにおいて伝えられる情報、意図の全てが言語表現によって担われるわけではない、という点である。皮肉の表現に見られるような「言外の意味」と呼ばれるものが語用論的側面の典型例であるが、その他にも、言語以外の手段で伝えられる内容がある。話し手が伝えようとする内容の一部は、顔の表情や声色によって表される場合があるだろうし、指差しによる対象指示、写真や図表を交えての情報伝達もあり得る。このようにコミュニケーション全体の中での言語表現の役割を捉えると、話し手の頭の中、聞き手の頭の中には、言語を越える内容があると考えの方が理に適っている。記号に基づく言語学のせいで抽象的な言語を想定することができるようになった背景の中で個別の言語行為を一義的に扱うことが新鮮に映るようになっただけで、言語の源泉はわれわれ人間の頭の中にある。思考の中身を考えるに当たっても、抽象的な存在物である思考(thought)から始めるのではなく、具体的な発話時の思考(thinking)から始めた方が具体的な手がかりを期待できる。

しかし、これまで発話時の思考の研究が比較的未開拓なのは、その具体的な手がかりを記述することの難しさに起因すると思われる。つまり、話し手によって意図されていることの中に言語で表現されない部分があるとして、それではそれを何で記述するか、という問題がある。本稿で参照する「話すための思考」に関する言語心理学的な研究は、被験者が絵や映像を見て言語で表現する実験などを通して、言語(母語)による状況描写に当該言語の特性がどの程度反映されるかを調べている。そして、異なる言語によって状況描写に差が出てくることから、何を話すかを決める“考えるプロセス”に光を当てようとする。これを通訳行為の観点から見ると、通訳者の頭の中で起点発話(SU: source utterance)のどの表現が目標発話(TU: target utterance)のどの部分の引き金になるか、あるいはSUに直接含まれないどのような情報がTUに含まれるか、ということに光を当てることになる。

2.2 概念化装置

「話すための思考」を考えるに当たってしばしば参照される発話モデルのひとつに Levelt(1989)の語彙仮説モデル(lexicalist hypothesis model)がある(図1)。ここでは、左上の概念化装置(conceptualizer)、および、そこから導き出される前言語的メッセージ(preverbal message)の部分に焦点を当てる。

図1 語彙仮説モデル(Levelt 1989: 9)



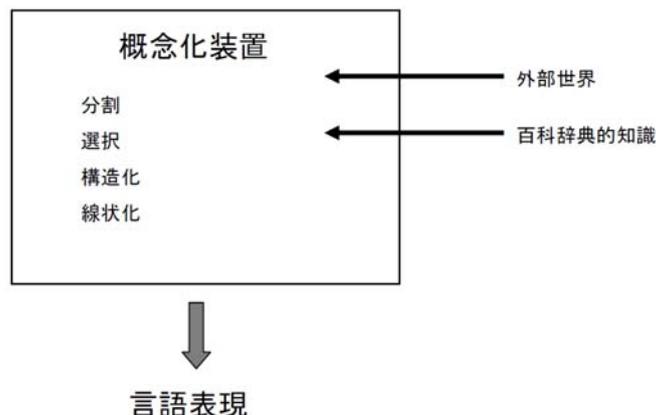
図の左半分が発話の基本プロセスであるが、矢印で示されているように、CONCEPTUALIZER (概念化装置)から生み出される preverbal message (前言語的メッセージ)が FORMULATOR (形式化装置)に送り込まれ、grammatical encoding (文法コード化)、phonological encoding (音韻コード化)を経て、ARTICULATOR (調音装置)によって音声化される、という構成である。本稿では、この概念化装置に注目し、その中身を検討するが、後述するように、概念化装置をより詳しく捉え、特に、「通訳するための思考」を考察する枠組みとして修正する。

このような概念化装置に対する個別言語の影響を調べようとする Stutterheim らは、概念化装置の具体的な働きとして次の4種類の処理を考えている(Stutterheim and Nüse, 2003: 853-4)。

1. 分割(segmentation): 静的な状況が多数の状態や属性記述に分解されたり、動的な状況が多数の事象(event)や過程に分解される。たとえば、女性が自転車に乗っている状況を見て、a woman is riding a bike と分割したり、あるいは a woman sits on a bike, she pedals and holds the handlebars with both of her hands と分割したりする(Bylund 2011: 110-1)。
2. 選択(selection): 言語化するかどうかという点での概念的部品の選択。たとえば、時間、場所を言語化するかどうかを選ぶ。たとえば、同一の状況に対して、the postman rang とだけ言語化するか、あるいは the postman rang at my door at 9 o'clock と言語化するか。
3. 構造化(structuring): “視点”に基づき述語タイプ(I received a parcel from him とするか he gave me a parcel とするか)、時空間配置(the postman went over to the house, he rang the bell, a woman opened and he gave her a parcel)、情報構造(何を主題／焦点にするか)などを決める。
4. 線状化(linearization): 選んだ要素を線状化する。

本稿では、概念化装置におけるメッセージの生成における言語の関わりを詳しく調べるために、図1の Levelt の CONCEPTUALIZER (概念化装置)に含まれる message generation を図2のように詳細化する。また、図1では CONCEPTUALIZER の出力となっている preverbal message (前言語的メッセージ)を“言語表現”とし、概念化装置内部の言語の役割を広く考える立場を導入する。さらに、Levelt の図では discourse model, situation knowledge, encyclopedia etc.となっている概念化装置への入力“外部世界”(発話者の外の世界に関する情報)と“百科辞典的知識”にまとめて表示し、monitoring の経路は省略する。以上をまとめると、修正された概念化装置は図2のようになる。

図2 概念化装置(一般的な発話)

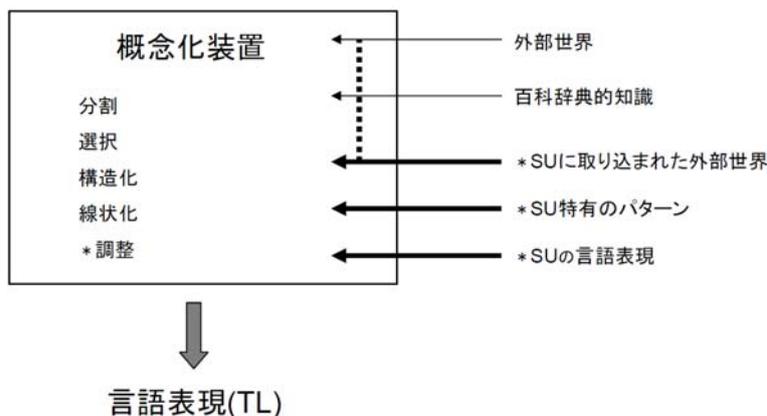


3. 「話すための思考」から「通訳するための思考」へ

3.1 通訳時の概念化と産出

通訳行為には聞くこと(言語表現の理解)と話すこと(言語表現の産出)の両方が関わってくるが、その2種類の言語行為は一般のコミュニケーションに見られる単独の理解と産出の単なる合算ではない。逐次通訳であれ同時通訳であれ、通訳者が話す内容の出所は原発話者であり、自分自身で直接外部世界を捉えた結果だけではない。むしろ、図3に示されているように、通訳者が話すための概念化装置には原発話者による言語表現(=起点発話、SU)からの情報が中核的な役割を果たす(図中、*印をつけた要素がSUの表現に関係する)。図3の概念化装置への入力は、“SUに取り込まれた外部世界”(原発話者が参照した外部世界をSUを通して通訳者が再構築したものに、通訳者自身の外部世界の情報と百科事典的知識が付加される)、“SU特有のパターン”(SL(source language:起点言語)特有の構文や表現形式に基づく発話パターン)、“SUの言語表現”に細分化されている。(もっとも、後で論じるように、項目として細分化はしても実際には全体として一体化したプロセスと見なすべきであろう。)また、概念化装置内部の「*調整」は入力SUとの関わりで必要になってくると考えられる。

図3 概念化装置(通訳)



概念化装置の観点から見ると、一般の発話の場合、発話者自らの意図、外部世界の状況

の観察などから概念化がスタートするのに対して、通訳者の場合は SU の言語表現、SU 特有のパターンに関する情報、SU に取り込まれた外部世界に関する間接情報から概念化がスタートする。

まず、通訳者が SU の言語表現を概念化装置への入力として活用する手順を考えてみる。たとえば次の(1)a のような英語表現を原発話者から聞き取るとすると、通訳者は2種類の処理を開始することになる。ひとつは、この表現を通して原発話者が伝えようとした意図、外部世界の状況を思い浮かべること、つまり、原発話の内容の理解である。これは一般的な聴き取りの目的である。もう一つの作業は通訳独特のもので、たとえば(1a)の英語表現に対応する日本語表現の準備である。ここでは、同時に訳すことも視野に入れて、日本語での後追いを基本としながら、“SUの言語表現”、“SU特有のパターン”、“SUに取り込まれた外部世界”というレベルの異なる情報の活用を考えてみる。(注²)

(1)a. The postman rang, I opened the door and he gave me a small parcel. (注³)

b. その(→φ)郵便配達夫がベルを鳴らしました。私はその(→φ)ドアを開けました。そして彼は私に小さな包みを与えました(→渡しました)。

英語の定冠詞 the は日本語では無標なので、省略できる(“→φ”で示されている)。言語表現に関わることとして、この発話の場合のように、三人称の he が主語で一人称が事物の移動先である場合、give に対応する日本語は「くれる」、「渡す」などが適切な表現となる。また、これが一連の出来事として描かれているのであれば自然な日本語表現は次のようになるだろう。

(1) c. 郵便配達夫がベルを鳴らし、私はドアを開け、そして彼は私に小さな包みを渡しました

(1b)から(1c)への調整には(1b)に示されている修正点だけではなく、「鳴らしました」「開けました」を動詞の連用形のみで短縮する修正も含まれている。日本語の複数の文のつながり方としては、このように、動詞の時制、丁寧を表す助動詞などを文毎につけずに最後にまとめてつけるのが自然と考えられる。そうすると、「鳴らす」、「開ける」、「渡す」というような語彙的な概念に加えて、“過去”、“丁寧表現”というような文法的な概念を追加的に処理する必要があることになる。それらをどのように組み合わせるか、は日本語表現に言語化する際の「選択」の対象と言える。ここでは、これも概念化装置が担当する処理と考える。Levelt のモデルでは概念化装置から出力されるのは“前言語的メッセージ”であり、その後の形式化装置、調音装置においてこの種の調整が行われると考えることもできるが、(1b)から(1c)への“変形”に概念的側面があると考えれば、概念化装置の内部で処理されるべきであると考えられる。また、(1b)や(1c)だけが可能な訳し方ではなく、たとえば(1d)、(1e)、(1f)などの訳し方も選択の対象になることを考慮に入れると、同一状況の“分割”、“選択”、“構造化”として概念化のプロセスの中で扱うのが妥当であろう。

(1) d. 郵便配達夫がやってきて、玄関で小さな包みを渡してくれました。[一人称の視点から

の分割、選択、構造化]

- e. ベルが鳴って、玄関に出ると、郵便配達夫が荷物をくれました。[一人称の視点からの線状化]
- f. 郵便配達夫が荷物を届けてくれました。[SUの分割と異なる分割－集約化]

同時通訳で短い訳が好まれたりすることには別の要因が関わるにせよ、このような訳し方が“分割”、“選択”などの概念的操作を必要とするのであれば、それは概念化装置内部の処理と考えるべきであろう。

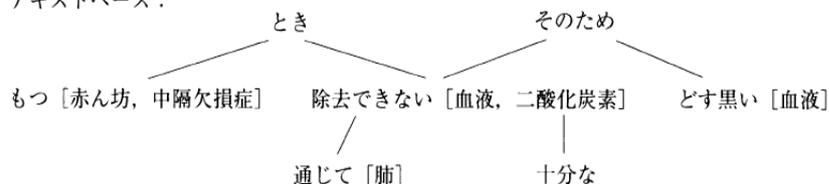
文章理解のプロセスに関し広く採用されている Kintsch (1994)の“状況モデル”は“SUに取り込まれた外部世界”の記述方法の参考になる。たとえば、(2)のような文章の理解は命題のネットワークである textbase(テキストベース)のレベルを経て、situation model(状況モデル)に至ると考えられている。

(2) When a baby has a septal defect, the blood cannot get rid of enough carbon dioxide through the lungs. Therefore it looks purple.

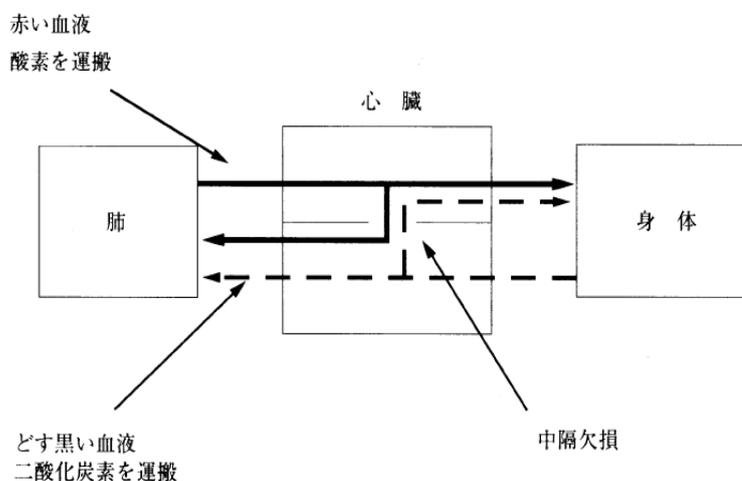
図 4 Kintsch の状況モデル(日本語版は川崎編著 2005:136 から)

文章：赤ん坊が中隔欠損症をもつとき、血液は肺を通じて二酸化炭素の十分な除去ができない。そのため、血液はどす黒く見える。

テキストベース：



状況モデル：



文章表現(2)の理解が図4の下半分で“状況モデル”として示されているが、図3における“SUに取り込まれた外部世界”は通訳者によってこのように再現される可能性がある。Kintschのモデルは理解のプロセスを扱っているのであるが、ここで考えている概念化装置は通訳するためのモデルである。通訳者にとっては聞き取ったSUの理解とそれに基づく発話が密接につながっていることから、この装置は他者の発言の理解と自分の発話の産出を一体として処理するモデルであると特徴づけることができる。通訳者の耳に届くのはSUの表面的な音声であるが、通訳行為を遂行するためには当然SUの内容理解が必要である。構文やテキスト構造などに関わるSU特有の表現パターンを見極め、SUが伝えようとする内容、つまりそこに取り込まれている外部世界のモデルを自身の発話、つまり通訳に反映させなければならない。そういう過程としての概念化装置には“状況モデル”のような理解の表示も役割を果たすと考えられる。通訳の質という別の視点から見れば、訳出がSUの言語表現の単なる置き換えになるのか、それとも内容を踏まえた正確でわかりやすい通訳になるのか、“状況モデル”の構築の質、すなわち、“SUに取り込まれた外部世界”の再構築の質に依存するとも言える。

「話すための思考」を調べる領域として事象(event)に注目する Stutterheim and Nüse (2003: 855)は次のような3つのレベルを区別するが、そのまとめ方は基本的に本稿での考え方に合致する。

- a. 状況のレベル(situation): 思考の外の世界で発生すること [Kintschの状況モデル参照]
- b. 事象のレベル(event): 状況の概念表示の中でまとまりのある部分 [概念化装置参照]
- c. 言語表示レベル(linguistic representation)

Stutterheimらは、これら3つのレベルの間には2段階のオプションの関係があるとする。まず、外部世界のある状況を事象としてどう認知するかというレベルaからbへのプロセスにおけるオプションがある。それは主として状況の“分割”の細さに関係する。(1a)の英語表現に対して例示された多様な日本語表現(1b)~(1f)を状況の切り取り方の違いと考えることができるが、同じ状況でも事象としての捉え方には選択の余地がある。レベルbからcへのプロセスにおけるオプションは事象を構成する要素の“選択”や構造化の“視点”に関わる。事象をどのように言語表示するかに関わるオプションである。これらのオプションが決定されて、言語表現の具体的な産出が実現する。本稿が目指すことは、これらのオプションをより具体化し、通訳のプロセスに当てはまるようなオプションを見極めていくことにあると言える。

3.2 事象構造の言語化

外部世界の様々な状況を言語で表現する際に中核的な役割を果たすのが、事象構造(event structure)と呼ばれる概念的要素のまとまりである。言語によって事象構造の捉え方に差があることから、通訳するための概念化装置には事象構造が当然含まれねばならない。前節図3の“SU特有のパターン”の具体例の一つが事象構造である。

まず、次のような実際の同時通訳例を使って、2言語に渡る概念的要素のまとまり(事象構造)の交差関係を考察する。上下に並んでいるSUの英語とTUの日本語は同一時間軸上に

乗っているので、それぞれのペアの 1 行目と 2 行目はほぼ実際のタイミングの関係を表している。

(2) (注 4)

SU: ... China and India, who are going to consume more energy than any other

TU: 中国、インド といったような大国を、この先、

SU: part of the world ...

TU: 他のどの国よりもエネルギー消費が増えるであろうという、これらの国々が・・・

図 5 は同時通訳例(2)を構成する概念的要素(注 5)の中で注目したい部分の概念的まとまりを楕円で囲ったものである。このような例を、SU(英語)と TU(日本語)における事象構造の組み替えと見る。

図 5 事象構造の組み換え

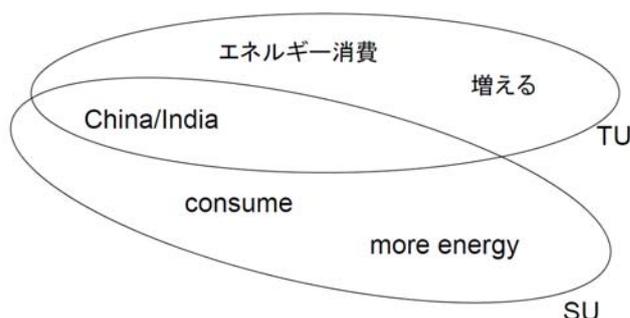


図 5 における楕円は SU、TU それぞれの事象構造の作り方を示したものである。SU のこの部分の英語表現は、China/India を主語として、energy を目的語として、consume を動詞として組み立てられている。そして、more が目的語の energy を修飾している。他方日本語では「中国、インド」(の)「エネルギー消費が」「増える」という文構造が使われている。(前者を英語特有の事象構造パターン、後者を日本語特有の事象構造パターンと見なすことが出来るが、ここではその一般性については論じない。)ここで注目したいのは、これらの事象構造を構成している図 5 の中の概念的要素を分解して、「エネルギー消費」は「エネルギー」と「消費」、more energy は「more」と「energy」という概念的要素から構成されていると考えるならば、事象構造の組み立て方は互いに異なる SU と TU の言語表現が共通の概念的要素に支えられている点である。つまり、SU の事象構造を組み替えることは、概念化装置の入力となった「SU 特有のパターン」を一旦はずして外部世界把握のレベルまで概念的に戻った結果であると考えられる。このような通訳現象の説明として、二言語間のパターン変換の公式化のようなことが考えられるかもしれないが、そういう言い方をするにしても、公式化の基になるのはここでの考え方と同じではないかと思われる。

3.3 構造化と視点

外界の状況を言語で表す際に、同一の状況を同一の統語構造で表す必然性はない。たとえば、一つの状況を能動態で表したり受動態で表したりすることができる。ここで、「言語によって状況を構造化する」と述べる際の二つの意味合いを念頭に入れておきたい。ひとつは、文構造に代表されるような各言語がもつ使用可能な構造を使う、という意味合いである。つまり、状況を言語表現化するための言語知識を使う、ということである。たとえば、男が走っていて、そのすぐ後ろを警官が走っている状況を日本語で表現するためには、「追いかける」という他動詞の知識、受動文にも能動文にもできるという知識などが必要である。もう一つは、具体的な発話でどの構造を選択するか、という意味合いである。ソシユール風に言えば、前者はラング(抽象的言語体系)、後者はパロール(言語運用)の問題である。

通訳における言語変換においては、これら二つの側面の両方が関わるが、「通訳するための思考」を明らかにするためには、単に「二側面が関わる」ことを認識するだけではなく、その関与の仕方にも注目せねばならない。つまり、通訳者は複数の表現候補に関する知識を持ち、結果的にはそこから一つを選んでいるのであるが、そのプロセスに含まれると考えられる概念化のレベルでは構造化に伴う「視点」が先に働いていると考えられる。

一例として、英語の *have* 構文を日本語の存在構文に置き換えた同時通訳の実例を使って「視点」の関わり方の実態について考察する。

(4)^(注7)

SU: We also have the Finance Ministers' agreement to cancel debt, and ...

TU: (省略) 私たち、また蔵相会議からの合意もあります。債務の帳消しであります。

原発話者は当該の状況を言語表現化するに当たり、*Finance Ministers' agreement* を *we* が *have* という見方(視点)に立ち、英語の他動詞構文で表現しているのが、通訳者は、「蔵相会議の合意がある」という存在文の形をベースに日本語表現を産出している。そもそも日本語では、「合意をもつ」という言い方ではなく「合意がある」という言い方がより自然と見られる。日本語の「ある」という動詞は、「不満がある」(*to have/make a complaint*)、「能力がある」(*to have an ability*)、「提案がある」(*to have/make a proposal*) など、極めて生産的な表現方法である。したがって、この例はラングのレベルに近い置き換え現象に見えるかもしれない。

しかし、この通訳者の発話(訳出)は状況を *dynamic* な *event* (出来事)と見るか *existence* (存在)と見るかの選択に関わっているのではないかと思われる。そしてこの TU においては、「蔵相会議」の存在がベースになっている。そのことは、SU の *Finance Ministers'* が TU では「蔵相」ではなく「蔵相会議」となっていること、TU に「から」がついていることから確認される。つまり、通訳者の頭の中には、先に行われた G8 蔵相会議の存在があり、また、先行文脈が OECD の支援倍増の決定に言及していることから、OECD からも蔵相会議からも支援の合意があるという視点が形成されていると考えられる。この点はさらに「も」によっても確認できる。このようなことから、通訳者の視点は、*Finance Ministers' agreement* を *we* が *have* というように状

況をまとめるのではなく、‘蔵相会議の合意’の存在を主題として状況をまとめるという視点を持っているのではないかと思われる。また、SUの *to cancel debt* という *agreement* を修飾する形容語句も、TU では「債務の帳消しであります」というように主題となっている‘合意’と同格の名詞表現で処理していることから確かめられる。そして、このように‘蔵相会議の合意’を主題として採択することが通訳者の基本的な視点であるならば、この視点は言語知識のレベルの視点ではなく、TU 発話時の通訳者の内容理解における視点と言え、それは SU 表現そのものの把握よりも深いレベル、すなわち、“状況”に近いレベルのことであると考えられる。

英語の *have* 構文が日本語の存在文に対応することを言語表現レベルのこととして文法比較に取り込む考え方も可能であるが、それを支える個々の言語使用の場面を考えるならば、発話の早い段階で“視点”の調整が行われ、その結果として相応しい構造が選ばれる、という面にも注目したい。これは単に言語表現の対応関係を確保するという機械的な置き換えよりも概念的に深いレベルでの判断とも考えられるからである。産出される言語表現の特徴はその言語に固有の性質と見なされる傾向があるが、むしろ固有の性質であるほど、状況の言語表現化の早い段階に関わっていると考えられる。一般的に、言語話者による表現パターンの選択は浅いレベルのことではなく、状況を概念的に把握する深いレベルでのことであると考えたい。

このことはひとりの通訳者の母語から外国語への通訳と逆方向の通訳の差に関係するかもしれない。状況の言語表現化の早い段階で TU の基本的性格を念頭に置くことができるかどうかはその言語の視点に対する馴染み加減に依存する可能性があり、馴染みが薄いと直訳的な処理に傾くかもしれない。

次の例も“視点”を変えて訳している。構文としては受動文を能動態文、品詞的には動詞を名詞に変えている。

(5)^(注 8)

SU: But we are confused when we visit Yasukuni, and see that it's not controlled by the

TU: (省略) しかし

SU: government but instead by a private organization ...

SU: 私たちが この靖国神社を訪れますと、これは政府の管理ではなくて民間の組織が管理しています・・・

この例では *is controlled by* という受動態が「政府の管理」「民間の組織が管理して」のように、名詞表現、能動態の動詞表現になっている。つまり、“視点”が変化している。態と品詞という 2 種類の文法項目が絡んでいるにもかかわらず、誰が何を管理しているかの関係、つまり動作主と対象の関係がきっちりと把握されていると思われる。SU では1回しか使われていない *control* に対して TU では「管理」が 2 回使われていることから、「政府」/「民間」と「靖国神社」の関係に関しては事象構造としてフレーム化された情報、あるいは通訳者自身の外部世界の状況に関する間接情報の入力確保されたと判断できる。通訳するための思考には語

句の単なる並びとしての言語情報を越えた情報が含まれていると考えられるが、その具体例がここに現れている。「政府によって管理される」よりも「政府の管理」という日本語表現の方が短いという別のレベルの配慮も関係する可能性はあるが、いずれにせよ「政府の管理」という表現を支える概念化における“視点”を踏まえた調整が行われている。

4. 結語

言語記号は形式と意味のペアであるという考え方は、近代言語学の基本であり、「言語と思考」の議論の前提ともなっている。しかし、言語を記号論的に見ることは言語を全面的に捉えることにはならない。実際のコミュニケーションで経験することに照らせば、言語にはもっと他の面があることがわかる。文脈によって意味が異なるということは、形式だけで意味は決まらない、ということであるし、「あれ」で話が通じるのであれば形式がなくても意味は伝わることになるし、「冗談だよ」と言って発言の罪を許してもらえらるなら形式は信用されていないわけであるし、言いたいことはわかっているのに言葉が出てこないことがあるということは意味だけで一人歩きできるということであるし、実際のコミュニケーションを考えれば形式と意味の関係はそれ程堅固なものではない。

しかし、だからといって、形式と意味の関係が尊重されなければ社会は崩壊するかもしれない。どんな通訳でも許されることになるかもしれない。外国語を身につけるためには語彙を増やす必要があるし、母語にしても不確かな語を辞書で確かめることは健全な企てである。誰が何と言ったかが重要な場面では通訳者の言語使用責任も重大である。

このような言語の多面性の出所である人の思考を明らかにすることは容易なことではないが、通訳のプロセスを考えてみると、そこにいろいろなヒントが隠されているようにも思える。「通訳するための思考」は「話すための思考」より特殊な面があるが、それ故に見えてくることもあるのではないかと思われる。同時通訳者の頭の中では、SU を理解することと TU を産出する準備が一体化されるが、その一体性を保証するものは何か、と考えると、そこには言語を支える概念の働き、すなわち思考がある。その活動にもっと目を向ける必要がある。つまり、概念的処理が重要な役割を持つ。逐次通訳の場合は SU を聞いている段階では訳出の発声は始まらないが、ノートテイキングを含め、産出の準備は始まっている。同時通訳では SU の理解と TU の産出が多少時間的にずれながらも並行する。いずれの場合も、理解、記憶、産出、検索などの対象の一貫性を保証するのは概念であると考えられる。表現そのものを記憶するだけではこれらの並行処理は破綻する。

しかし、概念を明示化することは難しい。それは間接的に輪郭を絞っていくような作業になり、形式的な表記に当てはまるような作業ではない。「話すための思考」を明らかにしようとする言語心理学におけるプログラムでは、言語間の微妙な、しかし有意な差を見つけだす試みが着実に行われている。もっとも、発話全般の仕組みを実験的に確かめるのは難しそうに思える。

「通訳のための思考」の研究は通訳を言語知識の面から描くのではなく、言語使用の面から描こうとする。つまり、具体的な場面で進行する個々の通訳作業において時間の流れと共に進行する通訳をオンラインで観察、分析することから始まる。本稿で提案したような概念化装置は通訳者の頭の中の働きを明らかにしようとするものであるが、概念という融通無碍なものを

捉えるにはいろいろな側面を、そしてそれらの絡み合いを明らかにしていかなければならない。本論文はその取っ掛かりを提供しようというものであり、議論もスケッチ的なものに留まっている。しかし、課題の輪郭はある程度提示できたのではないかと思われる。“線状化”にはほとんど触れていないが、ひとつには、単に要素を並べる作業ではなく、聞き手に対して提供する要素を情報構造に基づき実行するような概念機構を組み込むことが考えられるのではないだろうか。その他の点でも紙幅に収め切れなかったことが多々あるが、今後の課題としたい。

「通訳するための思考」の研究が通訳研究独自の領域に発展すれば幸いである。

.....
【著者紹介】

船山仲他(FUNAYAMA Chuta) 神戸市外国語大学学長・英米学科教授、専門領域は言語学(発話理解)および通訳研究、共著書に『言語学を学ぶ人のために』1986 世界思想社など。

.....

【注】

1. 英語表現の *thought* にも *thinking* にも「思考」という日本語を当てることは混乱を招くかもしれないが、日本語では「思考」と「考える(こと)」という表現の差に深い意味を込めることが難しい点を考慮し、どちらも「思考」とする。
2. 実際には、特に同時通訳の場合、たとえば文単位で SU 処理が終わってからその部分に対応する TU の産出に取りかかるというように訳出作業が段階的に進むと考えるのは現実的ではない。
3. 2、3.3 節の同時通訳例にも見られるように、SU の取り込みプロセスと TU の産出プロセスは一体化していると考えられる。
3. この英語表現は、Stutterheim and Nüse.(2003:855) から引用したものであるが、これは「分割」の例として示されている。彼女たちの実験では、被験者は映像を見た後、その内容をことばで報告する。同じ光景を見ても、*the postman delivered a small parcel* という言語化もあれば、*the door bell rang, I went downstairs and opened the door, the postman had come early, he opened his big bag, took out a small parcel and gave it to me.* という報告もあると説明している。通訳についても、同一の原発話に対する訳出のこのような種類の表現差を「分割」の観点から分類することができるであろう。
4. 2005 年 7 月 8 日、NHK-BS1『きょうの世界』(当時)から採録。話し手はブレア首相(当時)。TU に入っている「大国」や「この先」の表現を導く表現が SU にはあるが、それらはここでは省略した部分にある。
5. ここでは事象構造を特徴づける項や述語を“概念的要素”と呼んでいる。これは Funayama(2007)などで *conceptual element* と呼ばれているものに相当し、品詞の違いなどを捨象した概念である。本文の例では、「消費」(名詞)と *consume* (動詞)、あるいは「増える」(動詞)と *more* (形容詞)を概念レベルではどれも“概念的要素”の例と見なされる。事象構造を含め、このような概念的要素で構成されているものは一般的に概念的複合体(*conceptual complex*)と呼ばれている。

6. 2006年2月9日、NHK-BS1『きょうの世界』(当時)から採録。話し手は Bill Emmott 氏。
7. 2005年7月8日、NHK-BS1『きょうの世界』(当時)から採録。話し手はブレア首相(当時)。
8. 2006年2月9日、NHK-BS1『きょうの世界』(当時)から採録。話し手は Bill Emmott 氏。

【参考文献】

- Bylund, E. (2011). Language-specific patterns in event conceptualization: Insights from bilingualism. In A. Pavlenko (Ed.), *Thinking and Speaking in Two Languages*, Bristol/Buffalo/Toronto: Multilingual Matters.
- Funayama, C. (2007). Enhancing Mental Processes in Simultaneous Interpreting Training, *The Interpreter and Translator Trainer*, Vol.1 Issue 1, 97-116.
- Gentner, D. and S. Goldin-Meadow. (2003) Wither Whorf. In D. Gentner and S. Goldin-Meadow (Eds.), *Language in Mind*. (pp.3-14). Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, R. (2012). *A User's Guide to Thought and Meaning*. Oxford: Oxford University Press.
- Kintsch, W. (1994). Text comprehension, memory and learning. *American Psychologist*, 49, 294-303.
- Levelt, Willem J. M. (1989). *Speaking*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pöschhacker, F. (2011). Researching interpreting. In B. Nicodemus and L. Swabey (Eds.), *Advances in Interpreting Research*. (pp.5-25). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Slobin, Dan I. (1996). From 'thought and language' to 'thinking for speaking'. In J. J. Gumperz and S. C. Levinson (Eds.), *Rethinking Linguistic Relativity*. (pp.70-96), Cambridge: Cambridge University Press.
- Stutterheim, C. von and R. Nüse (2003). Processes of conceptualization in language production: Language-specific perspectives and event construal. *Linguistics* 41-5: 851-881.
- Tomlin, R. S. (1997). Mapping conceptual representations into linguistic representations: the role of attention in grammar. In J. Nuyts and E. Pederson (Eds.), *Language and Conceptualization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 川崎恵里子(編著)(2005)『ことばの実験室 心理言語学へのアプローチ』ブレーン出版

